
アジア眼科医療協力会（AOCA）の活動

アジア眼科医療協力会理事長

黒住 格*

1. AOCAの沿革

当会は1971年（昭和46年）の新聞の随筆からはじまった。「私の初夢」と題するこの記事は当時、日本ライトハウス理事長岩橋英行氏（故人）によるもので、その内容は『世界で最も失明者の多いアジア諸国の失明防止は、経済成長も終わっていまやアジアの先進国となった日本の率先して行うべきことであり、そのために、眼科医療のキャラバン隊をそれらの国に送り出そう』というものであった。この呼びかけに応じて京都一灯園及び神戸東ライオンズクラブよりいちはやく寄付金があり、大阪府眼科医会の有志が支援を表明した。私自身もこの時、呼びかけに応じた。

当初、会は政府の援助を受けながらこの仕事を遂行する計画であったが、事は容易には運ばなかった。我々は、とりあえず会の名を「東南アジア眼科医療協力会準備委員会」と決め、大阪府眼科医会長高橋幸男先生（故人）に委員長になっていただいた。我々は、当時はなやかだったスカルノ大統領とデビ夫人の関係からインドネシアをアジア諸国の代表と思い、インドネシアで仕事を展開することを頭に浮かべていたのである。

最初に取りかかった仕事は、眼科医療隊を受け入れるかどうかのアンケートをアジア諸国に送ることであった。それに対し、「医療隊は要らない、金を送れ」「医師、看護婦は要らない、自動車を送れ」とか期待にたがう返事の中に、ネパールだけが、「我々の国へ助けに来て下さい」という色よい返事を寄越した。

* くろずみいたる 〒663 西宮市甲子園口北町4-13 バラツィーナ甲子園口1-107号
電話 0798-67-3823 FAX 0798-67-3821

我々はネパールがインドの北方にある小国であることを確かめ、小さな会にとって組みし易しと考えた。ところが、その後は、一向に話が進展しない。ネパールにすれば、一度は色よい返事をしたものの、いざとなれば外国からの援助団体を受け入れるにはしっかりした受け皿が要る事に気がついたに違いない。

岩橋氏は、私が加入する前年から、万博で来日したネパールの有力者に接触したり、在ネ大使の根本氏に手紙を送ったりしていた。そのうち、根本大使は外務省に打電して、日本のこれこれの団体に便宜を計るようにと指示してくれた。大使からの公電は、外務省としては無視出来ず、国際協力事業団（当時OTCA）から、ネパールへ医療調査団を出すことになった。この調査団は、実際にはうるさいAOCAを封じ込んでしまうのが目的であったかもしれない。私は、眼科医として調査団に加わり、政府と合同の仕事が展開出来ると喜び、会は早くも看護婦の訓練などをはじめた。

しかし、OTCAとしては眼科の仕事をするつもりはなかった。彼らは我々よりも世界を知っていて、ネパールはまだ臨床医学で援助する時期ではないと考えていた。そのために、その時の調査団は団長をはじめ、団員を公衆衛生の専門家で固め、現地ではやはり公衆衛生の岩村昇先生が参加された。一行5名のうち、私だけが臨床医であった。

こういう具合であったから、ネパール側も公衆衛生畠の専門家を揃えて出迎えた。団員は同一行動を取ることを言い渡され、単独行動は許されなかった。実際にも、昼間の視察に統いて夜はミーティングとパーティーで、自由な時間は得られなかった。日本を出る前、この人に会うようにと言っていた頼みの綱のシャマル氏からは、赤痢にかかってしばらく会えないというメモが届いた。

行く先々の医療機関では「ネパールはまだ臨床医学の時代ではなく、予防医学の時代だ」と言われて私は困ってしまった。私自身、ネパールを見て廻るにつけ、国としてやるとすれば眼科の援助ではなくて公衆衛生であろうと考えるようになった。人々の家も、身なりも、食事も貧しくて、衛生観念は普及してなかった。ネパールはまさに公衆衛生医学の活躍の場であった。

そうは言え、私は眼科医であって公衆衛生活動が出来るわけはない。そういうしているうちに、ある決定的な場面に遭遇した。バイラワという町の病院に

一人の女の人が入院しており、ベッドの上で七転八倒して苦悶していた。この病院のただ一人の内科医は原因が分からぬと困っていた。私には急性緑内障と分かり、すぐ手術しようと何か切れるものを消毒してくれるよう言った。ところが、この病院には安全カミソリの刃さえなかった。団長からは公衆衛生は個人の悩みは問題にしないのだとなぐさめられたが、個人しか救えない臨床医の私は「これでネパールに借りが出来た」と感じた。

ネパール政府側との最終の話し合いは終わり、日本は公衆衛生でネパールに貢献することが決まった。眼科は取り上げられなかった。そのあとの数日間、私は自由に眼科関係の人と会った。そうすると当然この方面からもリクエストが出て来る。しかし、いかんせん勝負は終わっていた。

出来かかっている会の存亡を背負ってやって来た私にはつらい1ヶ月の旅であった。今振り返ると、この時のつらい旅が、そのあとの25年を持ちこたえさせたと思う。あの時眼科援助が取り上げられていたら、その後何年間か私がネパールで働くことはあったとしても、こんなに長くこの国に関係を持つことはなかっただろう。

帰国して、私のネパール行きは不成功に終わったと告げると、仲間は落胆した。もう打つ手はないから断念するしかないというところまでいった。私は、旅の終わりに眼科関係者と会って話した際、彼らが私に期待したことが気に懸っていた。そこで、私はもう一度一人でネパールに行って、友人になったプラダン氏と一緒に仕事をして、それで終わりにしようと考えた。そこで、親しい友人を廻って100万円の寄付を集め、それを持ってAOCAの仲間のところ行った。すると、みんな急に元気づき、またやろうと言い出した。

その金の中で、プラダン氏が欲しがっていたスリットランプを一台みやげに買い、残り60万円といくつかの機械を日赤を通してネパール赤十字社に送ってもらった。ここで困ったことが起きた。私の請求通り使えるようにと前もって言ってあったにもかかわらず、ネパールでは金も機械も容易に取り出せなかつた。実に何回も足を運んで、やっと一部を取り出すことが出来た。私は活動を始める前から疲れてしまった。

私ははじめてのアイキャンプ（野外開眼手術）をジャナクプールという町で

プラサド氏とやることになった。この人は眼科耳鼻科の専門医で、普段は耳鼻科医を札榜していた。眼科のみの専門医はこの国にはたった3人しかいなかつた。この初めてのアイキャンプに、かつてWHOから派遣されてネパールで働いた寄生虫学者正垣教授が日本から同行して下さり、青年協力隊の看護婦藤田マリさんが現地参加で協力してくれた。

2つ目のアイキャンプは、かねてからの友人プラダン氏とイナルワでおこなった。この時も協力隊の石田美佐子、岩田初枝の両看護婦が参加してくれ、偶然オッカルドゥンガでの診療の任期を終えたかつての僚友石田武医師がキャンプに現れて助けてくれた。幸運ばかりではなかった。イナルワキャンプの半ば、厚生大臣の来訪があるという情報が入り、その日は午後の手術をやめて待つことになった。絶食で待たされていた午後の手術予定患者は翌日の最後尾にまわされ、二日絶食させられた。そのうちの一人の老婆が二日目の夜中に亜熱帯のイナルワで凍死した。

とはいって、前年と違って、今度は凱旋帰国であった。帰国して報告するところの調子でやって行こうと仲間たちは大喜びであった。喜ぶ仲間に私は条件を出した。会を継続するなら、月に一回定期会合を開くこと、準備委員会の呼称をやめアジア眼科医療協力会とすること、初代理事長を岩橋氏にやってもらうこと、の3つであった。いずれも私が屋根に上っている間に梯子をはずされないための用心であった。当時、活動がうまく行く保証はなく、それについて会が動搖する可能性は大いにあった。岩橋理事長は日本ライトハウス内に事務局を置き、宮田氏を事務局長に立ててくれた。会は高橋先生の回生病院で月1回開かれ、会の基がだんだん固まってきた。

翌年のアイキャンプは、協力隊OBの柳田氏がマネージャーとして同行してくれ、現地では石田、豊島の2人の看護婦さんに助けられた。このころから会はネパール人の技術者の養成に手を染めることになった。これは、外国人たる我々の行うアイキャンプの意味に疑問を持ったことと、本当の援助はその国の人の自助努力を助けることだと気づいたからであった。こうすれば、ネパールに人を送らなくても会の事業が出来ることも1つのねらい目であった。この頃から、会の標語が「アジアの人々の目を守るために」にかわって、「ネパールの

ことはネパール人の手で」というのを多く使うようになった。AOCAの息子と呼ぶ研修生の1号はドゥアリカ氏であった。彼は東京のイナミ株式会社で機械修理の研修を行った。この時、我々は30才以下の男性を希望していたのに36才のドゥアリカさんは年齢をごまかしてやって来た。我々は彼が30才の気概でやって来たのだと考えて、研修を引き受けた。

この頃、会の方は事務局長が橋本氏に変わり、私との波長があつたため、事業を積極的に展開出来るようになった。AOCAの誕生と第一歩の歩み出しを多少詳しく書いたが、以後の活動は概ね“AOCAのあゆみ”で見ていただくことにする。

2. ネパールの一般事情と医療事情

ネパールは、北をヒマラヤ山脈によって限られ、残りの三方をインドに囲まれた内陸国である。海をもたないということは、ネパールの発展を大きく妨げているともいえる。概略の面積は、北海道の2倍、90%までが人の住めない山岳地帯である。緯度は大体沖縄と同じである。寒帯から亜熱帯まであるが、これは土地の高低による。こういう状況の中に、1,500万人の人が住んでいる。民族を構成するのは、35にも及ぶ民族で、まさに少数民族の集団である。交通事情は極めて悪く、南部国境近くを走るアジアハイウェイのほかは、首都カトマンズから南北に走る道路があるだけである。その他の交通機関としては、牧草地といったほうが似つかわしいような小さな飛行場が10ヵ所ほどある。国際空港は首都カトマンズ1ヵ所である。おもな産業は農業であり、南のタライ平野以外は、急峻な山地を耕している。

ネパールの経済的規模を眺めると、1985年の歳出6億2,500ドル、歳入は2億9,900万ドルである。歳入歳出の差は、国際援助によるものと思われる。これを、わかりやすく日本の都市と比べてみると、歳入では私の勤務する人口約8万8,000人の芦屋市の1.8倍にすぎない。一国の経済規模が県単位でさえなく、小都市のそれに比較できる程度なのである。

ネパール盲人協会会长兼眼科医師であるプラサド氏は、1982年の視覚障害者の指導者をめぐる第1回ネパール全国ワークショップで、ネパール国民の一般

の状態を次のように述べている。「国民の96%が農村に住みつき、識字率は24%、平均寿命は46歳、乳児死亡率は52%、幼児の死亡原因のトップは胃腸炎、国民の40%が1日2ルピー（14円）以下の収入で、いわゆる飢餓ライン以下の生活をし、全国の医師の数は450人」、最近、ネパールにも日本政府の援助で医大が出来、医師の数は700人を越える程度にはなってきている。

疾病は、これら国民の生活程度の高さと平行するものであるからその状況は想像できる。話を我々の関係する眼科医療に引き戻していくと、我々がこの国に関係をもち始めた17年前には眼科医はたった3人であった。このような状況下で協力を始めたが、1985年頃からネパールでも上記医大出の自前の医師がもてるようになり、今ではネパールの眼科医は70人を越えている。

3. ネパールにおけるAOCAの活動

ネパールにおける活動は短期的なものと、長期的なものとがある。

短期的なものとは、昭和49年以来殆ど毎年のように行っているアイキャンプである。これは、ネパールの乾期である冬に、すなわち日本の冬休みの時期に、有給休暇を加えて現地入りして行う野外開眼手術のことである。はじめ、ネパール側で計画されたものにジョイントした形で行っていたが、今では独自のキャンプを行うようになっている。表1はアイキャンプに参加した人員とその成果である。

長期的な活動としては、24時間テレビとの共同事業として行っているナラヤニプロジェクトがある。これは、資金面をテレビが受け持ち、医療面を当会が受け持つという形をとっているが、このプロジェクトから飽浦医師をビルガンジ・ケディア病院に2年半に亘って派遣した。彼は同病院での診察のかたわら日本式診療形態をネパール人医師の間に浸透させ、考え方生きざまの上でも見本を見せたという意味で大きな意味を持った。7人の眼科医療助手を育て上げたことも彼の業績である。その後、佐藤、黒田、川口医師らが3ヵ月から2年の間同病院に滞在して成果を上げた。

もう一つは、機械修理技術者シバコティ氏の業績である。彼は我々の4番目の息子として来日し、延べ2年半の間、日本の各医療機械メーカーで研修を積

表1 年度別アイキャンプ

派遣数／ 年度	派遣者数		キャンプ地	手術患者数
	医師	他		
1 S. 49	1	5	ジャナクプール等3ヵ所	745
2 S. 50	1	3	バトラプール等2ヵ所	978
3 S. 55	3	3	バヤルパタ等2ヵ所	356
4 S. 56	3	3	ダラン	153
5 S. 58	2	6	ハリナガラ等2ヵ所	260
6 S. 59	3	3	バクタプール等3ヵ所	315
7 S. 60	2	3	オラベリ等3ヵ所	162
8 S. 61	3	4	ビルガンジ	200
9 S. 62	2	1	ドウビー	153
10 H. 1	4	2	サリアン	483
11 H. 2	3	3	ゴール	561
12 H. 3	5	6	バグタプール等3ヵ所	775
13 H. 4	4	2	パンチカル等3ヵ所	576
14 H. 5	3	4	パンチカル等2ヵ所	648
15 H. 6	6	5	ルグウ等2ヵ所	564
16 H. 7	10	1	パンチカル等2ヵ所	450
計	55	54		7,379

んだが、帰国して色々な機械を作り、我が会に貢献するとともに自国ネパールのために尽くしている。

表2はAOCAが養成した研修生である。

AOCAのこのような努力も、ネパール側に受け皿がなければ報いられなかった。これを見事にやってくれたのが自らネパール・ネット・ジョティサンガという団体を作って各国のNGOを引き込むと共に、ネパール中に15の眼科病院を作って、眼科の医療体制をほぼ確立したポークレル氏である。

当会が現在ネパールに展開している主な活動をあげると、a. ケディア病院

表2 年次別研修者リスト及び経費

氏名	性別	職業	研修年度	研修期間
ドゥアリカ・マン	男	眼科器械技員	S.50	4ヵ月
シバ・プラダン	男	コンタクトレンズ	S.52	6ヵ月
マンジュ	女	視能訓練士	S.56	51ヵ月
シバコティ	男	眼科器械技員	S.58	21ヵ月
モハン・ラナ	男	眼科衛生検査技術員	S.60	14ヵ月
シバコティ	男	眼科器械技員	S.61	4ヵ月
ネパリ	男	盲人リハビリ指導員	S.61	12ヵ月
デリップ	男	コンタクトレンズ	S.59~63	26ヵ月
ス希尔	男	針灸師		
ランバ	女	眼科看護婦	S.62~H.1	18ヵ月
D. P. カルキ	男	眼科医	H.1	3ヵ月
ドゥアリカ・マン	男	眼科器械技員	H.1	1週間
カドカ	男	眼科医	H.3~	3年間予定
キラン	男	眼科器械技術員	H.3~5	24ヵ月
シャクンタラ	女	眼科看護婦	H.5~6	9ヵ月
デウジャ	男	眼科医	H.6	3ヵ月
リジャール	男	眼科医	H.6	1ヵ月
アチャーリヤ	男	眼科助手	H.6	3ヵ月
マノジ	男	眼科助手	H.6	3ヵ月
シバ・プラダン	男	コンタクトレンズ	H.6	1ヵ月

の経営（ほぼ完成）、b.パンチカル眼科診療所の経営（進行中）、c.ゴール眼科診療所の建設（着手）、d.ゴルチャ眼科病院・ライオンズ眼科病院・ネパール眼科病院への援助等（進行中）である。

我々の活動に当たっては、毎年チャリティーバザーで助けてくださる安野様をはじめとする甲子園口婦人会の方々、事業費の半分以上を助けてくださっている国際ボランティア貯金の関係の方々、人材育成等でいつも協力して下さっている神戸北ライオンズクラブの方々はじめ多くの団体・個人の方々に心から御礼を申し上げる。

4. 年表・アジア眼科医療協力会（AOCA）のあゆみ

1971年（昭46）	準備委員会誕生。委員長高橋幸男博士。
1972年（昭47）	黒住委員をネパールへ派遣。この年、日本政府は眼科援助をとりあげなかった。民間で「アジア眼科医療協力会」結成。初代理事長岩橋英行氏。第1次ネパールアイキャンプ、745名の開眼手術。
1973年（昭49）	第2次ネパールアイキャンプ、978名の開眼手術。
1975年（昭50）	ネパール人ドゥアリカ・マン氏を日本に招き、4ヵ月間の眼科医療機械修理の研修をさせる。
1976年（昭51）	ネパールとタイに医療機械を贈る。
1977年（昭52）	ネパール人シバ・プラダン氏を日本に招き、7ヵ月間眼科の検査、コンタクトレンズ技術の研修をさせる。眼科機械をネパールに贈る。
1979年（昭54）	ビルマ（現ミャンマー）、バングラデシュ、ネパールに薬品、眼科医療機械などを贈る。
1980年（昭55）	ビルマ（現ミャンマー）、バングラデシュに薬品と眼科機械を贈る。第3次ネパールアイキャンプ、356名の開眼手術。ネパールに医療機械を贈る。西宮市第1回チャリティーバザー。
1981年（昭56）	ネパール人マンジュ嬢を日本に招き、視能訓練士の研修をさせる。4年後、日本の国家試験に合格。ネパール第1号の視能訓練士誕生。ネパールに眼科機械の実地指導。西宮市で第2回チャリティーバザー。
1982年（昭57）	第4次ネパールアイキャンプ、約50名の開眼手術。ネパール人シバコティ氏を日本に招き、2年間の眼科機械修理工の研修をさせる。ネパールにアイキャンプ用ジープ1台を贈る。西脇市でチャリティー。岩橋理事長死去。第2代理事長高橋幸男博士。

1983年（昭58）	第5次ネパールアイキャンプ、262名の開眼手術。カトマンズの数ヶ所の病院で技術指導、機械修理。西宮市で第3回チャリティーバザー。随筆集「ネパール神々の大地」（黒住格著）出版。
1984年（昭59）	第6次ネパールアイキャンプ、355名の開眼手術。教育病院眼科に2名の眼科医を派遣。ネパールに眼科機械を贈る。西宮市で第4回チャリティーバザー。
1985年（昭60）	第7次ネパールアイキャンプ、62名の開眼手術。ネパール人モハン・ラナ氏を日本に招き、1年間の病原細菌培養その他の研修をさせる。AOCAボランティアでネパール人ディリップ・プラダン氏を招き、3年間のテレビ技術研修をさせる。西宮市で第5回チャリティーバザー。写真文集「ネパール通信」（黒住格編著）出版。
1986年（昭61）	第8次ネパールアイキャンプ、212名の開眼手術。ネパール人ホーマン・ネバリ氏を招き、一年間の盲人生活訓練指導の研修をさせる。ネパール人シバコティ氏を再度日本に招き、4ヵ月間のレーザー光凝固装置の補修点検技術の研修をさせる。細菌検査機械多数をネパールに贈る。日本政府の援助でレーザー光凝固装置2台をネパールに贈る。芦屋市でEyeしたいConcert。西宮市で第6回チャリティーバザー。
1987年（昭62）	第9次ネパールアイキャンプ、153名の開眼手術。ネパール人ランバ娘を日本に招き、1年半の手術場看護婦研修。ネパール人スシール・サキヤ氏の鍼灸研修に協力し、3年後、日本の国家試験に合格。西宮市で第7回チャリティーバザー、加西市で第1回チャリティーバザー、芦屋市で第2回EyeしたいConcert。
1988年（昭63）	飽浦医師を1年7ヵ月間、ネパール国ビルガンジ・ケディア病院に長期派遣、開眼手術2000人、眼科医療助手7人の養成、地域の眼衛生教育等に尽力（日本テレビとの共同事業）。西

- 宮市で第8回チャリティーバザー。高橋理事長死去。第3代理事長西田武氏。
- 1989年（平1） 第10次ネパールアイキャンプ、487名の開眼手術。ネパール人カルキ医師を招き、東大で3ヵ月間の硝子体に関する研修を援助、超音波診断装置1台を贈る。ネパール人ドウアリカ・マン氏の再研修。西宮市で第9回チャリティーバザー、芦屋市で第3回Eyeし合いたいConcert。
- 1990年（平2） 再び飽浦医師を半年間ビルガンジに派遣（日本テレビとの共同事業）。第11次ネパールアイキャンプ、561名の開眼手術。西宮市で第10回チャリティーバザー、加西市で第2回チャリティーバザー。随筆集「ビルガンジ通信」（飽浦淳介著）出版。
- 1991年（平3） ネパール人カドカ医師をインドに派遣、3年間の眼科医師専門資格研修、しかし家庭の事情で一時中断。眼科機械修理工キラン・ポークレル氏を日本に招き、2年間予定の研修開始。京都市でのアジア太平洋眼科学会にネパール人眼科医等を招き、日・ネ眼科シンポジウムを開催。西宮市で第11回チャリティーバザー、加西市で第3回チャリティーバザー。第12次ネパールアイキャンプ。
- 1992年（平4） 写真集「神々の大地 ネパール紀行」（井口博之写真）出版。黒田医師を3ヵ月、佐藤医師を半年間、ビルガンジ・ケティア病院に派遣（以上、日本テレビとの共同事業）。飽浦、和田、安藤、八田医師、大久保、岡田看護婦派遣による神戸北ライオンズクラブとの合同第13次アイキャンプ。手術顕微鏡等をライオンズ・クリニックに、スリットランプをゴルチャ病院に贈る。西宮市で第12回チャリティーバザー、加西市で第4回チャリティーバザー。
- 1993年（平5） 和田、飽浦、清川、八田、生越、三輪、前、矢崎、村元を派遣して第14次ネパールアイキャンプ。黒住、橋本、川俣を事業計画検討のためネパールに派遣。

キラン・ポークレル氏の研修を終了。シャクンタラ・ポークレルさんを淀川キリスト教病院、あさぎり病院等で手術場中材管理の研修。ケディア病院に佐藤医師を1年間、続いて川口医師を4ヵ月間派遣（24時間テレビとの共同事業）。西宮で13回、加西で第5回チャリティーバザー。ブックレット「市民による海外医療協力20年」（黒住格著）出版。

1994年（平6）

鮑浦、瀬戸川、黒田、木内、百々、清水、大久保、魚谷、三輪らを派遣して、第15次アイキャンプ。パンチカルに眼科診療所開設。アルゴン・クリプトンレーザーをゴルチャ病院に、眼軸長測定装置、簡易硝子体手術機などをケディア病院に、シノプロトフォアをライオンズ眼科診療所に贈る。シャクンタラさんの研修終了。リジャール医師とアチャリヤ、マノジ・ウパディアら眼科助手を短期間串本等で研修。デウジャ医師を3ヵ月間串本で眼科研修。シバ・プラダンをサン・コンタクト等で再研修。ビルマEENT病院にアクロマイン眼軟膏贈る。西宮市で第14回、加西市で第6回チャリティー。西田理事長が外務大臣表彰。文集「ハムロ・ネパール」出版。ポークレル、プラダン両医師がアジア岩橋武夫賞受賞。ネパール人医師カドカ氏のインドヒンドゥー大学における研修再開を支援。

1995年（平7）

鮑浦、黒田、川口、牧野、広田、浜橋、大手、石野、八田医師、大久保看護婦らを派遣して、第16次アイキャンプ、450名の開眼手術。パンチカル眼科診療所開設。ゴルチャ眼科病院、ライオンズ・アイケア・センター、ケディア眼科病院、ネパール眼科病院にアイキャンプで使用した手術機械器具等を寄贈。ゴルチャ病院にケラトメーターを寄贈。ネパール眼科病院、ケディア病院、ゴルチャ病院のレーザー修理のため、紺野、佐野氏を派遣。カドカ医師への勉学支援。パント氏の活動、サヒ氏の活動、NAOCAASの活動を支援。日本ビル

マ救援センターへ検眼レンズセット一式を寄贈。「ネパールアイキャンプ（ビデオ）」（飽浦、村元製作）が、シートル眼科学会で2等賞を受賞。ナラヤニアイケアプロジェクト（ケディア眼科病院）の経営。西田氏勇退につき、第4代理事長黒住格。

《インフォメーション1 研究雑誌 1996年4月～1996年9月》

目に“ゴミ”が飛ぶ—網膜はく離の場合—（本田孔士）

きょうの健康 通巻101号 Pp.110-113 1996年8月

眼圧が高い—緑内障の場合—（本田孔士）

きょうの健康 通巻101号 Pp.114-117 1996年8月

目の不自由な方とともに楽しむウォークラリー（佐藤喜也）

戸山サンライズ情報 第128号 Pp.15-17 1996年4月

視覚障害者施設における食事の実態と問題点（角南圭子）

戸山サンライズ情報 第129号 Pp.8-10 1996年5月

視覚障害者向け放送の充実について（郵政省放送行政局放送政策課放送

ソフト振興室） 戸山サンライズ情報 第131号 Pp.16-17

1996年7月

日本で学ぶ盲留学生と国際視覚障害者援護協会

働く広場 第228号 Pp.17-20 1996年9月

盲人の気持ちを大切にするガイドボランティアグループ「ペアフレンド」

リハビリテーション 第382号 Pp.40-43 1996年4月